

[報 告]

新約聖書の死生観*

原口 尚彰

序

新約聖書の死生観は基本的には、旧約・ユダヤ教の死生観の継承発展であるが、イエスの死の意味に集中することによって、人間に不可避な死の運命を受容し、克服する新たな地平を切り拓いている。但し、新約聖書中に表現されている死生観は、文書によって強調点が異なり、ヴァリエーションも認められるので、本稿では共観福音書に見るイエスの死生観、パウロの死生観、ヨハネ福音書の死生観、黙示録の死生観を個別に検討した上で、全体的展望を得ることとする。

第1節 共観福音書に見るイエスの死生観

共観福音書の記述によれば、イエスはその教えを、抽象的な教理命題の形で展開することをせず、聞き手である紀元1世紀のユダヤの民衆やイエスの弟子達の現実を念頭に置きながら、喩え話や対話の形で具体的に述べている。死生観についても、イエスは体系的に論じることせず、対話の相手の必要に応じて随時、核心を衝いた鋭い言葉を畳みかける手法を採用している。

(1) イエスと死者の復活の観念

死者の復活に関するイエスの考えは、マルコ12:18-27に見られるイエスとユダヤ

* 本稿は2013年8月26日に東北学院大学で開催された「第7回教職（牧師・聖書科教師）研修セミナー」で行った講演原稿に加筆したものである。

教指導者達との間に交わされた議論に表れている。このユダヤ教指導者達はサドカイ派に属しており、死者の復活の考えについては否定的であった（ヨセフス『ユダヤ古代誌』13.171-173, 289-98；『ユダヤ戦記』2.160-165；使23：8）。彼らは、ある女性が生前に夫を亡くし、レヴィラート婚の習慣に従って（申25：5-10）、その弟と結婚することを繰り返す、生涯に7人の男性と婚姻関係を持つ結果となったような場合、もし、世の終わりに死者の復活が起これば、一体誰の妻となるのかと問いかけた（マコ12：18-23）。これは、もし死者の復活ということがあるとすればどんなに不合理なことが起こるかを示して、死者の復活の観念に内包する矛盾を明らかにしようとした意地悪な質問である¹。

初期ユダヤ教の復活思想は、セレウコス朝シリアのヘレニズム化政策の下で起きた（前140年頃）、ユダヤ教徒の迫害と殉教の状況の中で生まれた。そこでは現世では悪が勝利しているように見えても、世の終わりの時においては、神の正義が勝利し、義人は復活して祝福を受け天国に入るとされた（ダニ12：：1-4；IIマカ7：1-41）²。死者の復活の観念については当時のユダヤ教の中に異なった意見があり、ファリサイ派は肯定し、サドカイ派は否定した（ヨセフス『ユダヤ古代誌』13.171-173, 289-98；『ユダヤ戦記』2.160-165；使23：8）。

サドカイ派の人々の問いに対して、「あなた方は聖書も神の力も知らないのに、思い違いをしているのではないか。死者の中から復活するときには、娶うことも嫁ぐこともなく、天の御使のようになるのだ。死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神が彼にどう告げたか、読んだことがないのか。『私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなた方は大いに思い違いをしている」と、イエスは答えた（マコ12：24-27私訳）。

イエスの考えは、死者の復活の観念を認める点においては、サドカイ派よりもファリサイ派の立場と一致する。しかし、宗教的な想像力を駆使して誰も見たことがない死後の状態を思い描くことについては、イエスは大変慎重であるように思われる。イ

¹ E. Lohmeyer, *Das Evangelium des Markus* (KEK; 17. Aufl.,; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1967) 255-256; J. Gnilka, *Das Evangelium nach Markus* (2 Bde; EKK II; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag; Zürich: Benzinger, 1989) II 157-159; R. T. France, *The Gospel of Mark* (NIGTC; Grand Rapids: Eerdmans, 2002) 472-473; A. Y. Collins, *Mark* (Minneapolis: Fortress, 2007) 560-561.

² 佐藤研「新約聖書の死生観」同『はじまりのキリスト教』岩波書店、2010年、32-34頁を参照。

エスは、死後の世界における生については、「娶ることも嫁ぐこともなく、天の御使のよう」であるとする以上には語っていない（エチ・エノ 15: 7; 51: 4 も参照）。さらに、イエスは、「私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」という旧約聖書の言葉を死者の復活を示す根拠として引用した後に（出 3: 6）、神は「生きている者の神」であることを強調して、話を締め括っている（マコ 12: 27）。「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」という言葉は、出エジプト記の文脈では、モーセに対して顕現した神の自己紹介の言葉であり（出 3: 6, 15 を参照）、族長に対して与えた契約を覚えて、その子孫であるイスラエルを救出する意思を示しているに過ぎない（3: 16-17）。イエスはこの言葉を、族長たちが天上で神のもとにあって終末時に復活するのを待っていることを示した言葉と解釈したのだった（ルカ 16: 19-31; エチ・エノ 70: 4; ベニ遺 10: 5-6 を参照）³。

(2) イエスにおける死の受容の問題

福音書が描くところによれば、イエスはメシア僭称者として、エルサレムにおいてローマ総督によって十字架刑に処せられた（マコ 15: 1-15; マタ 27: 11-26; ルカ 23: 13-25; ヨハ 18: 28-19: 16）。福音書物語の後半は、イエスがエルサレムでの死へと近づいていく歩みを描写している。この部分には、死の運命を受け入れるイエスの心の葛藤と、それを直視することを拒否する弟子達の心の模様が浮き彫りになっている。

イエスは、ガリラヤの町や村を巡回して、神の国の教えを説き、様々な病に苦しむ人々を助けた後（マコ 1: 14-9: 29）、弟子達を率いてエルサレムへと向かう（マコ 9: 30-11: 14）。弟子達は、エルサレムで自分達の先生が王位に就く栄光を夢想していたが（マコ 9: 33-37; 10: 35-45）、イエス自身は自分がそこで指導者達によって捕らえられ、拷問を受け、処刑されることを既に予知しており、弟子達には密かにそのことを告げていた（マコ 8: 31-33; 9: 30-32; 10: 33-34 並行）⁴。しかし、弟子達

³ 佐藤研「新約聖書の死生観」『はじまりのキリスト教』36-37頁を参照。尚、Lohmeyer, 257; 大貫隆『イエスという経験』岩波書店、2003年、60-62頁は、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という句に着目し（マコ 12: 26）、イエスが、族長たちが既に復活し、天上で生きている者達であると考えていると解釈するが、終末以前に族長が復活したということを示明的に語る初期ユダヤ教文書はない。他方、Gnilka, 160; Collins, 562-564 は、族長たちの魂が死後、天上にあって、復活を待っている中間状態を想定している。さらに、E. Schweizer, *Das Evangelium des Markus* (NTD3; 17. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1989) 136 は、神が契約の当事者として、族長たちを終末時に復活させることを述べていると考える。

⁴ 伝承史的に言えば、受難予告（マコ 8: 31-33; 9: 30-32; 10: 33-34 並行）は、史的イエス

は現実に目を向けようとせず、イエスの言葉を受け入れず、依然としてエルサレムでの栄光を夢見ていたと福音書は述べている（マコ 10：35-45 並行）。

死の運命を受け入れる葛藤がイエスになかった訳ではない。最後の晩餐の後にエルサレムの門外にあったゲツセマネの園で、イエスは弟子のペトロ、ヤコブ、ヨハネを従えて祈りの時を持った（マコ 14：32-42 並行）。イエスはこの時に、弟子達に死の恐怖を語っている。マルコ福音書が語るところによれば、「イエスはひどく恐れて苦しみ始め、『わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい』と彼らに言った（マコ 1：33-34 私訳）。イエスは死を前にした恐れと苦しみを率直に吐露して、弟子達に同伴して欲しいと求めたのだった。ところが、弟子達は眠りこけて同伴者の務めを果たさず、イエスは一人で神に対して祈り続けた。イエスは、「アッバ、父よ、あなたは何でもお出来になります。この杯をわたしから取り除けて下さい。しかし、わたしが望むことではなく、あなたが望むことを（行い下さい）」と祈り、最終的運命を受け入れたとされている（マコ 14：32-36）。このイエスの姿は、初代教会の人々に対して死の運命の受容の模範を示していた（ヘブ 5：7-9 も参照）。

第2節 イエスの死と復活

(1) イエスの死（マコ 15：20-41）

イエスは十二弟子の一人ユダの手引きによってエルサレムの指導者たちが遣わした群衆によって過ぎ越の祭りの時にゲツセマネの園で捕らえられ（14：43-50）、大祭司が主宰する最高法院の審問を受ける（14：53）。最高法院は宗教的事柄について管轄権を持ち、イエスの行動・言動がユダヤの律法違反でないかどうかを見極めようとしている。ここでイエスを断罪する証言がなされ、その最も主要なものはイエスが神殿の破壊を予告したというものである（マコ 14：58；15：29；マタイ 26：61；ヨハネ 2：19-22）。イエスは宮清めの出来事や（マコ 11：15-19）、神殿破壊の預言（13：1-2）に見られるように、当時のエルサレムの神殿やそこで行われる祭儀に対して大変批判

に遡るのではなく、初代教会の伝承とそれを継受して福音書物語の中に配したマルコの編集的意図に帰される。現存の形の受難予告は、イエスの死からの復活への信仰を前提にしており、初代教会の信仰の投影が見られるが、イエスが上京する途上で、エルサレムで非業の死を遂げることを予期していた史的可能性は残る（ルカ 11：49-50；12：50 他を参照）。U. Wilckens, *Theologie des Neuen Testaments* (Band I.2 Jesu Tod und Auferstehung und die Entstehung der Kirche aus Juden und Heiden; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2003) 1-15; A. J. M. Wedderburn, *The Death of Jesus* (WUNT 229; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2013) 47-66 を参照。

的であった。このことが神殿権力を握る祭司長たちの怒りを招き、受難を被る直接の契機になった。しかし、イエスを死刑にする決定的な罪状は、大祭司がイエスを尋問する過程で得られた。「お前は讀むべき方 (=神) の子、キリスト (=メシア「油注がれた者」) なのか」という大祭司の問いに対して、イエスは「そうです。あなた方は、人の子が全能の神の右に座り、天の雲と共にやって来るのを見る」と答えた (14: 62)。このイエスの言葉は詩編 110: 1 とダニ 7: 13-14 を組み合わせた引用であり、「人の子」は天来の審判者を指す称号であると解されていた (ダニ 7: 13-14 を参照)。イエスが自分を「人の子」と同視した上に、「全能の神の右に座り、天の雲と共にやって来る」審判者として描いたことは、神の名を冒瀆する者として死に値するとされた (マコ 14: 64)⁵。

当時の最高法院はローマによって死刑にする権利を認められていなかった (ヨハ 18: 31 を参照)、祭司長たちは死刑にする権威を持つローマ総督のもとにイエスを訴えた (マコ 15: 1)。総督ピラトはユダヤ教固有の宗教的事柄には関心がなく、イエスの行動がローマへの反逆罪を構成するかどうかという一点に審理の焦点を合わせた。イエスのメシア僭称の問題を、祭司長たちは神の名の冒瀆の問題として理解したが、ローマ総督は政治的反逆の問題として理解した (メシア = 「油注がれた者」は元々イスラエルの王の称号)。ピラトはこのイエスがローマの支配に対して叛旗を翻したとは思えず、祭りの度に一人の囚人に恩赦を与える習慣に従ってイエスを釈放しようとしたが、群衆の圧力に負けて十字架に付けることを決定し、刑の執行吏であるローマ兵の一隊に身柄を引き渡した。罪状は「ユダヤ人の王」としてローマの支配に反逆したことであった (15: 26)⁶。

イエスはローマの兵士たちによって十字架に架けられた (マコ 15: 24)。十字架刑は当時の最も残虐な死刑執行方法であり、受刑者は生きたまま杭に釘付けられ長い時間苦しみながら死んでいった。当時の十字架刑は残虐さと恥辱さのイメージに結びついていた (ヘブライ 12: 2 を参照)⁷。イエスが十字架刑に処せられたことは、ローマ

⁵ France, 612-618; D. L. Bock, *Blasphemy and Exaltation in Judaism and the Final Examination of Jesus: A Philological-Historical Study of the Key Jewish Themes Impacting Mark 14: 61-64* (WUNT 106; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1998) 113-183 を参照。

⁶ E・ローゼ「新約聖書における死と生」O・カイザー/E・ローゼ著 (吉田泰・鶴殿博喜訳)『死と生』ヨルダン社、1980年、大貫隆「新約聖書における死の意味」『死と生を考える』144-145頁を参照。

⁷ マルティン・ヘンゲル (土岐正策・土岐健治訳)『十字架 その歴史的探究』ヨルダン社、1983年、48-53頁を参照。

への反逆罪に対する処罰として行われたことを意味する。このことはその罪状が「ユダヤ人の王」であることと対応している。イエスと共に十字架にかけられた二人の犯罪者たちは政治犯でありローマへの反逆者たちであった（マコ 15：27「強盗」は反逆者をローマ側から評価した呼び方）。

十字架上のイエスは、昼の一二時からあたりは暗くなり、三時に及んだとき、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と叫んだ（マコ 12：33-34）。これは当時のユダヤ人たちの日常用いていたアラム語で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味であり、旧約聖書の詩編 22：2 のアラム語による引用である。受難物語はイエスの受難を主として旧約の詩編以来の苦難の義人のイメージで描いている（詩 22；31；34；37；69；140 を参照）⁸。神の国の宣教のためにその生涯を捧げた者が、ローマの極刑である十字架刑を受けて、苦しみながら死んでいく様は、神は何をしているのかという問いを生む。イエスはまさに神から見捨てられたかのような状態の中で世を去ったことを、マルコによる福音書は強調している⁹。但し、詩編 22 編は、苦難の訴えで始まるが、次第に神への信頼のモチーフが強くなり、神への賛美の言葉で終わるので（特に詩編 22：23-32 を参照）、イエスの十字架上の言葉も究極的には、神への信頼の下に発せられたとする解釈もある¹⁰。

ルカ福音書は十字架上で語ったイエスの別の言葉を伝えている。ルカ 23：46 によれば、イエスは十字架上で息を引き取る直前に、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と言った（詩 31：6 を参照）。この言葉は、十字架上に刑死する自己の運命を受容し、すべてを神に委ねるに至ったイエスの姿を描き、苦難の運命を甘受して信仰の生涯を貫く信徒の模範として提示している（使 7：59 を参照）¹¹。さらに、ヨハ 19：30 は、イエスが十字架上で、「成し遂げられた」と語ったと述べる。そこでは、十字架上の死によってイエスの生涯の業が完結したことが強調されている。

⁸ G. Barth, *Der Tod Jesu Christi im Verständnis des Neuen Testaments* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991) 28-32.

⁹ Lohmeyer, 345-346; Gnllka, 321-322; France, 652-653; Collins, 753-755; Wilckens, *Theologie*, I, 2, 105-107 を参照。尚、大貫、『イエスという経験』215 頁は、イエスの十字架上の叫びを「自分自身にとって意味不明な死」についての「懸命な問い」だったことを強調する。

¹⁰ E・シュタウファー（高柳伊三郎訳）『イエス：その人と歴史』日本基督教団出版局、1962 年、156-157 頁；F. J. Matera, *Kingship of Jesus: Composition and Theology in Mark 15* (Chico, CA; Scholars, 1982) 132-135；J. W. van Henten, “Jewish Martyrdom and Jesus’ Death,” in *Deutungen des Todes Jesu im Neuen Testament* (hrsg. v. J. Frey / J. Schröter; WUNT 181; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) 161-162.

¹¹ Barth, 137-138 を参照。

処刑の一部始終を見届け、イエスの死を看取っていたのは、男性の弟子たちではなく、マグダラのマリアと小ヤコブとヨセの母マリア、それにサロメラガリラヤからイエスに従ってきた女性の弟子たちであった（マコ 15：40-41）¹²。彼らはイエスの十字架の証人であるだけでなく、イエスの復活の最初の証人として受難・復活物語の中で重要な役割を演じている（16：1-8）¹³。

（2）復活顕現

マグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメという三人の女性たちが、週の初めの日（つまり日曜日）の早朝にイエスの墓に向かった。その目的はイエスの遺体に香油を塗って葬るためであった（16：1-2）。墓に着くと墓の入り口に封をしていた大石が取り除けられていた（16：3-4）。彼女らが墓にはいるとイエスの遺体はそこになく、天使からイエスの復活の知らせを受け、復活のキリストがガリラヤへ入ったことをペトロら弟子たちに伝えるように指示される（16：5-7）。こうして、彼女たちはキリストの復活の知らせの最初の証人になったが、異常な出来事におびえたので何も言わなかった（16：8）¹⁴。

マルコ福音書は、空の墓の出来事の報告で終わっているが、他の福音書は、復活したキリストが弟子たちの前に姿を現す復活顕現の出来事を様々に報告している。ルカによる福音書は、復活者がエルサレム周辺のエマオ途上の弟子たちに現れた出来事や（ルカ 24：13-35）、エルサレム市内で、弟子たちに姿を顕した出来事について報告している（24：36-49）。エルサレムにおける復活顕現物語は、復活の証人としての務めと聖霊の付与の約束で結ばれている（24：46-49）。

マタイ福音書 28 章は復活のキリストと弟子たちとのガリラヤでの出会いを簡潔な筆致で描いている。ユダを除いた 11 人の弟子たちはイエスと天使の指示の通りにガリラヤの山へ行く（マタ 26：32；28：10）。ガリラヤはイエスが弟子たちを召し（4：18-22）、宣教といやしの旅をし（4：17, 23-25）、山の上で教えた場所であった（5-7 章）。ガリラヤの山上に顕現した復活のキリストは、弟子たちに新たな使命を与え、送り出した。復活の主の言葉は下記のような大変荘重な調子で弟子たちに宣教の務めを託している。

¹² 佐藤「新約聖書の死生観」『はじまりのキリスト教』38 頁を参照。

¹³ Schweizer, 198-206；Gnilka, 325-326, 337-346.

¹⁴ 尤も、マタイ福音書によると彼女たちは恐れつつも喜びながら、ペトロらの所に走って行く途中で、復活のキリストに出会っている（28：8-10）。

「わたしは天上、地上の一切の権威を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民を私の弟子し、父と子と聖霊の名によって洗礼を受け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。見よ、わたしは世の終わりまで、常にあなたがたと共にいる」(マタ 28: 18b-20 私訳)。

第2節 パウロの死生観

(1) 死の起源

パウロは創世記の墮罪の物語(創3: 1-24)を黙示的視点から再解釈し、「一人の人を通して、世界に罪が、また、罪を通して死が入った。こうして、すべての人に死は到来し、すべての人々は罪を冒した」(ロマ5: 12)と述べる。この部分は、人間に対する罪の普遍性を述べている部分であるが、同時に、世界に死が存在するようになった起源についての説明を与えている。創世記の記述自体は、アダムとエヴァがヤハウエの言いつけに反して禁断の木の実を食べたために(創2: 15; 3: 6-7)、楽園から追放される際に、アダムへの罰として、労働の苦しみと生涯を終えれば、「土に帰る」ことが宣告されたと述べている(創3: 17-19)。楽園追放の目的は、命の木の実を食べることで永遠に生きる者とならないためであるとされている(創3: 22)。創3: 19のヤハウエの言葉は、有限な存在として創られた人間が避けることの出来ない死の運命を確認する効果を持っていた。

パウロの解釈は、現在の世界が罪と死の支配下にあることを強調し、救いが来たるべき世界に属するとする黙示文学的墮罪物語解釈を継承・発展させたものである(IVエズラ3: 3-7を参照)。人類の始祖アダムの不従順によって、世界に罪と死が入ったとパウロが述べる時、罪と死が人格化されて、全人類の歴史を支配する力として捉えられている。パウロはモーセの律法の到来以前の人々にも死が不可避であった事実を、罪の支配の証拠としてあげている(ロマ5: 14)。アダム以後の世代の人間にとり、罪と死は不可避な宿命として人間に及ぶのであるが、罪は人間の思いと行動によって現実化するもので、「こうして、すべての人に死は到来し、すべての人々は罪を冒した」とパウロは付け加えている(ロマ5: 12)。

さらに、パウロは死の起源の話を、アダム-キリスト予型論の中に位置づけ、一人の人イエス・キリストの死という義なる行為を通して、死の支配が打ち破られて、恵みと義の支配が確立し、人々を永遠のいのち導くとしている(ロマ5: 15-21)。

キリストの義なる行為によって罪と死の支配が打ち破られているというキリスト論的視点から、人間に不可避な死の宿命を振り返っているのである¹⁵。現存の古い世界は、罪と死に支配されているが、キリストの義なる行為によってもたらされた新しい世界によってのり越えられ、義といのちと恵みの支配が罪と死を凌駕しようとしている。

(2) イエスの死の意味

イエス・キリストがローマ総督ポンティオ・ピラトによって、ローマ支配に反逆した政治犯として十字架刑に処せられて死んだことは、通常ならば一つの宗教運動の挫折としか理解されない。しかし、このイエスの死に、初代教会の人々は救済論的な意義を見出すに至った。初代教会は、イエスの死を私たち罪人の罪の贖いのための死(マコ 10: 45; ロマ 3: 25; 4: 25; ガラ 1: 5; I コリ 5: 7 を参照)、或いは、代理の死(ロマ 5: 6, 8; 8: 32, 35; 10: 9; 14: 15; ガラ 3: 13; I コリ 15: 3 を参照)と理解した。こうしたキリストの死の理解の形成にあたっては、旧約聖書の祭儀的贖罪の表象(出 21: 30; 25: 17-22; 30: 12; レビ 5: 16-19; 9: 1-21; 16: 13-19, 29-34; 23: 27-32; 民 35: 31-32)、奴隷の贖い(身請け)の表象(出 21: 2-8; レビ 25: 48-51; 申 15: 12-18)、イザヤ書 53 章の苦難の僕の姿(イザ 53: 3-5, 10-12)、さらには、ヘレニズム・ユダヤ教が発達させた義人の死による民の罪の贖いの表象(II マカ 7: 37-38; IV マカ 6: 27-29; 17: 21-22 を参照)が複合的に働いたと推測される¹⁶。

¹⁵ 原口尚彰『新約聖書神学概説』教文館、2009年、68-70頁を参照。

¹⁶ 詳しくは、Barth, 37-71; W. Kraus, *Der Tod Jesu Christi als Heiligtumsweihe. Eine Untersuchung zum Umfeld der Sühnevorstellung in Römer 3, 25-26a* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991); H. Merklein, "Der Tod Jesu als stellvertretender Sühnetod. Entwicklung und Gehalt einer zentralen neutestamentlichen Aussage," in ders., *Studien zu Jesus und Paulus* (WUNT 43; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1987) 181-191; "Der Sühnetod Jesu nach dem Zeugnis des Neuen Testaments," in ders., *Studien zu Jesus und Paulus II* (WUNT 105; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1998) 31-59; T. Knöppler, *Sühne im Neuen Testament. Studien zum urchristlichen Verständnis der Heilsbedeutung des Todes Jesu* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2001) 110-173; J. Schröter, "Sühne, Stellvertretung und Opfer," in *Deutungen des Todes Jesu im Neuen Testament* (hrsg. v. J. Frey/J. Schröter; WUNT 181; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) 62-63; B. Janowski, "Das Leben für andere hingeben," *ibid.*, 110-115; J. W. van Henten, "Jewish Martyrdom and Jesus' Death," *ibid.*, 151-155; T. Söding, "Sühne durch Stellvertretung," *ibid.*, 375-396; R. Zimmermann, "Die neutestamentliche Deutung des Todes Jesu als Opfer. Zur christologischen Koinzidenz von Opfertheologie und Opferkritik," *KD* 51 (2005) 72-99; ローゼ「新約聖書における死と生」『死と生』156-164頁、大貫「新約聖書における死の意味」『死と生を考える』152-159頁、同『イエスという経験』217-222頁、佐藤「新約聖書の死生観」『はじまりのキリスト教』40-41頁、原口『新約聖書概説』80-81頁を参照。

パウロはこうした初期キリスト教によるイエスの死の理解をさらに進めて、次の様に述べている。「実にキリストは、私達がまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者のために死んだ。義人のために死ぬ者はほとんどいない。善人のために命を惜しまない者ならあるいはいるかもしれない。しかし、私達がまだ罪人であったとき、キリストが私達のために死んだことにより、神は私達に対する愛を示した。それで今や、私達はキリストの血によって義とされたのだから、尚更のことキリストによって神の怒りから救われるであろう。敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解を受けたのであれば、和解を受けた今は尚更のこと、御子の命によって救われるであろう。そればかりか、私達の主イエス・キリストによって、私達は神を誇りとしている。今やこのキリストを通して和解を受けたからである」(ロマ5: 6-11 私訳)。

罪人の罪の贖いのための代理の死の運命を引き受けた、キリストの自己犠牲的行為の中に、パウロは罪人に対する神の子の愛を見出した(ロマ8: 32, 35も参照)¹⁷。罪人が罪に留まり、神への反抗を続ける限り、神の怒りが罪人の上に向けられるが、キリストの愛の行為によって神の怒りが取り除かれ、神と人類の間に和解と平和が成立したとされる¹⁸。

(3) 死者の復活の希望

キリストの復活についての最も古い証言は、Iコリ15: 1-8において使徒パウロが引用している初代教会の信仰告白伝承である。この伝承によれば、イエスは聖書に書かれている通り、死後三日目に甦り、ケファ(ペトロ)ら十二弟子に現れ、500人の兄弟たちに現れ、主の兄弟ヤコブと他の使徒たちに現れ、最後にパウロ自身に現れたとされている。

初代教会の人々にとって、終わりの時にキリストの再臨と共に死者が復活し、キリストと共にあることは希望の対象であった(Iテサ4: 18-25, Iコリ15: 12-19)。そうした希望の根拠は、キリストが死者のうちから復活したことであった(Iコリ15: 1-11)¹⁹。キリストの復活は、「最後の敵」である死に対してキリストが勝利したことを意味する(Iコリ15: 26, 54-55; さらに、ヘブ2: 14-15を参照)²⁰。キリストを

¹⁷ Söding, 379.

¹⁸ Barth, 98-100; Schröter, 63-66を参照。

¹⁹ ローゼ「新約聖書における死と生」『死と生』164-170頁, 大貫「新約聖書における死の意味」『死と生を考える』147-152頁を参照。

²⁰ Barth, 85-97を参照。

信じる者達は、キリストが復活したように、終わりの時に甦ると信じていた（ロマ 6：4-5；Iテサ 5：10-11）²¹。パウロは特に、死者の復活の観念に対して懐疑的であったコリントの教会の信徒の一部に対して、彼がかつてコリント伝道のときに伝えた福音の核心として（ロマ 1：1-5；Iコリ 15：1-11）、キリストの死（Iコリ 15：3）と三日目の甦り（15：4）とを挙げている。キリストの福音の宣教者としての務めも、この復活のキリストとの出会いに由来していた（15：5-11）。

パウロによれば、さらに、キリストを信じて洗礼を受けた者は、キリストと共に十字架に架けられて（ロマ 6：6；ガラ 2：19）、キリストの死に与り、その復活の力に与って、キリストと共に生きるようになる希望が与えられている（ロマ 6：3-8）²²。キリストと共なる死という表象は、古い人間実存の在り方が終焉し、キリストに仕える新しい人として生きることを表現している。

（4） 召天の思想

死者の復活と靈魂不滅とは、本来は全く起源が異なる思想であった。特に、靈魂不滅の思想は旧約聖書には由来せず、基本的にはギリシャ起源であった（正確には、オルフェウス教とプラトン主義）²³。この考えによると、人間の魂は不滅であり、一時的に人間の肉体に宿るが、死後は肉体を離れる（プラトン『パイドン』80A-81D）。魂にとって肉体は牢獄であり、死は解放と見なされる。聖書にはこのような霊肉二元論は弱く、魂と肉体の両方を備えた人間の一体性が旧約・新約を通して強調されている²⁴。復活思想は肉体を伴った人間の復活を考えているので、靈魂不滅の思想とは明確に異なる。しかし、死後の魂の状態への思索を進める過程で、次第に靈魂不滅の思想が初期ユダヤ教を介して（知 3：1-5；IVエズラ 7：78-101 を参照）、キリスト教思想の中に取り入れられて行った。つまり、人間が死ぬと体は滅びるが、魂は天国（神の許）に昇るという召天、或いは、昇天の思想が形成されて行った。但し、こうした思想は、新約文書ではまだ周辺的な箇所に出て来るだけである（ルカ 16：19-

²¹ 大貫「新約聖書における死の意味」『死と生を考える』168-172頁を参照。

²² 詳しくは、Wedderburn, 153-161を参照。

²³ O. Cullmann, *Immortality of the Soul or Resurrection of the Dead?* (London: Epworth, 1958) = O・クルマン著（間垣洋助訳）『靈魂の不滅か死者の復活か？』聖文舎、1970年を参照

²⁴ H. W. Wolff, *Anthropologie des Alten Testaments* (München: Kaiser, 1973) = H・W・ヴォルフ『旧約聖書の人間論』日本基督教団出版局、1983年、U. Schnelle, *Neutestamentliche Anthropologie* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991) を参照。

31; 24: 43; II コリ 5: 1-10; フィリ 1: 23; 黙 6: 9-11; 7: 9-17 を参照)²⁵。

パウロはフィリピ書の執筆時には、キリストの福音を宣べ伝える活動の故に、エフェソで身柄を拘束され、裁判の結果を待たなければいけない状況にあった（フィリピ 1: 12-14; I コリ 15: 32; II コリ 1: 8-9）。状況は厳しく、裁判の結果によっては、死刑になり、殉教する可能性があった。彼はこの時には、死の宣告を受けたも同然であり、キリストを死人の内から復活させた神に望みを掛けたと語っている（II コリ 1: 8-9）。死を覚悟したパウロは、「わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのである」とまで言い切っている。さらに、彼はこの世を去って、キリストと共にある方が望ましいとも語っている（フィリ 1: 23）。パウロは初代教会の信仰告白伝承に従って、終わりの時における死者の復活を信じ、そのように繰り返し、信徒達を教えたのであるが（I テサ 4: 18-25, I コリ 15: 12-19 を参照）、同時に、死後に魂が天に召され、キリストと共にあるという観念も持っていた（II コリ 5: 1-10; フィリ 1: 23）。パウロによれば、究極の救いは終末時の復活に求められるが、終末の到来以前の間中時において、死者の魂は天上にあって復活を待つ中間状態に置かれていることになる。

第3節 ヨハネ福音書の死生観

(1) イエスの死の意味

ヨハ 1: 29 において、洗礼者ヨハネは、イエスを指して、「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」と語り、イエスの死が贖罪の意味を持つことを象徴的な言葉で述べている（イザ 53: 7; 使 8: 32; I ペト 1: 19 を参照）。この部分は、伝統的な贖罪論をヨハネによる福音書が前提にしていることを示している（I ヨハ 3: 5 も参照）²⁶。

ヨハネによる福音書に収録されているイエスの別れの説教において、イエスは、「友

²⁵ F. Zeilinger, *Der biblische Aufstehungsglaube* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2008) 147-148 を参照。

²⁶ Barth, 49; R. Bultmann, *Das Evangelium des Johannes* (10. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht; 1941) 66-67; R. E. Brown, *The Gospel according to John* (2 vols; AB29; Garden City: Doubleday, 1967) I 58-63; R. Schnackenburg, *Das Johannesevangelium* (4. Aufl.; 3 Bde; Freiburg: Herder, 1979) I 285-289; C. K. Barrett, *The Gospel according to St. John* (2nd ed.; London: SPCK, 1978) 176-177; U. Wilckens, *Das Evangelium nach Johannes* (NTD 4; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1997) 40-41; U. Schnelle, *Das Evangelium nach Johannes* (ThHKNT 4; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 1998) 49-50; A. J. Köstenberger, *John* (Grand Rapids: Baker, 2004) 66-68; H. Thyen, *Das Johannesevangelium* (HbNT 8; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) 119-123 を参照。

のためにいのちを捨てることに優る愛は誰も持たない」と述べる（ヨハ 15：13 私訳）。他方、イエス自身がいのちを捨てることについて、良い羊飼いの喩え話では、「私は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のためにいのちを捨てる」と述べており（ヨハ 10：11）、イエスの死が自発的であり、究極の愛の行為であることを強調している（ロマ 5：6-11；I コリ 5：14 も参照）²⁷。

イエスの十字架上の死は、「挙げられる」とも（3：14；8：28；12：32-34）、「栄光を受ける」とも表現されている（12：23；13：31-32；17：1, 5）。十字架刑はローマ帝国によって反逆者に対して下された残虐な刑罰であり、苦難と恥辱の極みであるが（ヘブ 12：2 を参照）、第 4 福音書においては神の子の栄光の顕現の時とされているのである²⁸。キリストの十字架は、世を愛して救いのために独り子を与えた神の愛の顕現である（ヨハ 3：16 以下を参照）²⁹。

(2) イエスの復活・顕現物語

ヨハネによる福音書は、ローマ総督の配下の兵士達によって処刑され、埋葬されたイエスが（ヨハ 19：26-42）、三日目に甦って顕れた出来事を独自の視点から叙述している。空のキリストの墓が空であることを発見したのはマグダラのマリアであり、そのことをペトロとイエスの愛弟子とが確認する（20：1-10）。その後、墓のところで泣いていたマリアに復活のキリストが顕現し、彼女はキリストの復活の出来事の最初の目撃者となる（20：11-18）。マリアは復活のキリストと出会ったことを、「私は主を見ました」と言っただけで弟子たちに伝える（20：18）。その日の午後、復活のキリストは、エルサレム市内の家の中にいた弟子たちのもとに現れ、彼らに罪を赦す務めを与えて、世に遣わしている（20：19-23）。しかし、その場に居合わせなかったために主の復活顕現を疑う弟子トマスがいたので、八日後にキリストは再び顕現し、トマス

²⁷ Barth, 99-100, 145-147; J. Augenstein, *Das Liebesgebot im Johannesevangelium und in den Johannesbriefen* (BWANT 134; Stuttgart: Kohlhammer, 1993) 71, 73-74; E. E. Popkes, *Die Theologie der Liebe Gottes in den johanneischen Schriften. Zur Semantik der Liebe und zum Motivkreis des Dualismus* (WUNT II 197; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) 181-183, 309-310. を参照。

²⁸ T. Thüsing, *Die Erhöhung und Verherrlichung Jesu im Johannesevangelium* (2. Aufl.; Münster: Aschendorf, 1970) 199-201; K. Wengst, *Bedrängte Gemeinde und verherrlichter Christus* (München: Kaiser, 1992); T. Knöppler, *Die theologia crucis des Johannesevangeliums* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1994) 154-173; C. Dietzfelbinger, *Der Abschied des Kommenden* (WUNT 95; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1997) 283-292; H.-U. Weidemann, *Der Tod Jesu im Johannesevangelium* (Berlin-New York: Walter de Gruyter, 2004) 97-128.

²⁹ Barth, 142-147 を参照。

に対して、「幸いである。見ないで信じる者は」と宣言している（20：29）³⁰。さらに、ヨハネによる福音書 21 章は、ガリラヤ湖畔での復活のキリストと弟子たちとの出会いを描いている。その際に、キリストは弟子のペトロに羊を飼う務めを委ねている（ヨハ 21：15-19）。

（3）永遠のいのち

ヨハネによる福音書には、死者の復活と死後の裁きについての伝統的観念を語る部分は存在するが（ヨハ 5：28-29）、強調点は、人間の死後の運命よりも、地上の生涯の中で、人間がキリストとその言葉を信じるかどうかということにある。第四福音書によれば、今、キリストを信じる者は死から命に既に移っており（5：24-27）、永遠の命を得ている（3：15, 16；4：13-14；6：27, 47, 52-58）³¹。この場合の「いのち」や「死」とは、人間の生物学的な意味での生命や死ではなく、象徴的・霊的な意味での「いのち」や「死」である（マタ 10：39；マコ 8：35；ルカ 17：33 も参照）³²。ヨハ 17：3 によれば、「永遠のいのち」とは、「唯一の真の神」と神が遣わした御子「イエス・キリストを知ること」であるとしている。ヨハネの理解する「いのち」や「死」とは関係概念であり、神と御子キリストを信じて正しい関係にあることが、救いの状態である「永遠の命を得ている」こととなる。これに対して、キリストを信ぜず、神を知らず、神から離れた状態にあることが、人間が死んでいることである。究極的な出来事は、既に、地上で起こっていると言える。

第 4 節 黙示録の死生観

厳しい迫害下に執筆された黙示文学には、人間の死後の幸いについて語るものが多くある（ダニ 12：1-3；エチ・エノ 58：2；81：4；スラ・エノ 42：6）³³。黙示録も黙示文学の例に漏れず、地上の生活においてイエスへの信実を貫いた人間の死後の幸い

³⁰ この箇所についての詳しい釈義的分析は、Bultmann, 539-540；Brown, *John* II 1048-1051；Schnackenburg, *Johannes* III 398-399；Barrett, 573-576；Wilckens, 316-318；Schnelle, *Johannes*, 307-309；Thyen, 770；原口尚彰『幸いなるかな 初期キリスト教のマカリズム（幸いの宣言）』新教出版社、2011年、102-106頁を参照。

³¹ Bultmann, 109-111；佐藤研『新約聖書の死生観』『はじまりのキリスト教』46-47頁を参照。

³² 大貫隆『新約聖書における死の意味』『死と生を考える』176-178頁を参照。

³³ 原口尚彰『幸いなるかな 初期キリスト教のマカリズム（幸いの宣言）』新教出版社、2011年、149-150頁を参照。

について多くを語っている。死後の世界について想像力を逞しくして描くことについては、抑制的な態度を示す他の新約文書とは対照的に、黙示録は通常では見ることの出来ない天上の世界の有様や、来たるべき終末の時の到来に際して展開される不思議な出来事を色彩豊かに視覚的に描いている。

(1) 天上の礼拝

黙示録6章では殉教者たちの魂が天上の祭壇の下にあって、不義への裁きを求めて神に叫び、訴えている(黙6:9-11)³⁴。こうした天上の場面が描かれる前提として、ヘレニズム期以降ユダヤ教やキリスト教の死生観に影響を与え始めた、人間の魂は死後に肉体を離れ、生き続けるという観念が存在している(プラトン『パイドン』80A-81D; 知3:1-5)³⁵。不義を働く敵への復讐を求める祈りは既に旧約聖書の中に存在するが(詩7:7-18; 35:17-28; 55:10-24; 59:6-14; 69:23-30; 79:6-13; 83:13-19; 109:8-20; 137:7-9; 139:19-22 他)、義人の死後の魂が神に公正な裁きを求めて叫ぶ主題は、ユダヤ教黙示文学において展開されている(エチ・エノ47:1-4; IVエズ4:35-37)。

黙示録7章では、白い衣を着た群衆が登場し、ナツメヤシの枝を持ちながら、神と小羊に讃美の歌を捧げているが、彼らは迫害の中で節を曲げずに命を落とした殉教者たちであった(7:9-17; また、18:24; 19:1-4も参照)³⁶。彼らは地上では苦難の生涯を送ったが、天上では神の玉座の前で仕える幸せな時を過ごしている。彼らは最早飢えることも渴くこともなく、日照りに悩まされることもない(7:15-16)。「玉座の中央にいる小羊が彼らの羊飼いとなり、命の泉へと導き、神が彼らの目から涙をすべてぬぐい去るのである」(7:17)。死後に信者が天に召されて幸いな生活を送ることが、黙示的イメージによって表現されている。死者たちは、大バビロンであるローマへ裁きが下った後に、天上において行われる小羊の婚礼の祝いに招かれている(19:5-10)。

(2) 終末の時の到来と死者の復活

終末の時の到来と死者の復活について、黙示録は独特のヴィジョンを持っている。

³⁴ 佐竹明『ヨハネの黙示録』中巻、新教出版社、2009年、293-300頁。

³⁵ D. E. Aune, *Revelation 6-16* (WBC 52B; Nashville, TN: Word, 1998) 403-413を参照。

³⁶ 佐竹、316-331頁; Aune, 466-480を参照。

終末の時が到来すると、まず、一人の天使が悪魔の化身である竜を取り押さえ、千年の間、縛って底なしの淵に閉じ込めておく(20: 1-3)。その時に、イエスへの信実を貫いて殉教した者たちだけが復活して、キリストと共に世界を千年の間統治する(20: 4)³⁷。これが第一の復活である(20: 5)。千年の時が経過した後に、悪魔が解放され諸国の民とゴグとマゴグを唆して、信徒たちとエルサレムを攻めさせるが、天上から火が下って彼らを滅ぼし、悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれる(20: 7-10)。この時、第二の復活が起こって、死者は善人も悪人もすべて甦って、玉座の前で、命の書に従って裁かれることになる(20: 11-15)³⁸。キリストは死と復活によって死に勝利した存在であり、その手の内に死と陰府の鍵を持っている(1: 18; 2: 11)。死と陰府は死者を吐き出した後に、火と硫黄の池に投げ込まれることになる(20: 13-14)。

天地の更新の後に、天から新しいエルサレムが下って来るが、そこでは神と人が共に住み、人は神の民となる(21: 1-3)。「最早、死もなく、悲しみと嘆きもない」(21: 4)。地上の生活においてキリストへの信仰を貫いた者は、命の泉の水を飲む特権に与るが、棄教者や不信仰者や不道德な者たちは、火と硫黄の燃える池に投げ込まれ、第二の死を味わうとされる(21: 5-8)³⁹。死後の世界における永遠の幸いと永遠の責め苦を対照して述べることを通して、黙示録は読者たちにキリストへの信実を貫く生涯を送るよう勧めるのである。

まとめと展望

以上の検討で分かるように、新約聖書の死生観は一様ではなく、共観福音書、パウロ書簡、ヨハネ福音書、黙示録の死生観は、それぞれの関心や、置かれた歴史的状況を反映して多様な様相を呈している。共観福音書は十字架上の死という過酷な運命に直面し、苦しみながらもそれを受容して行くイエスの姿を旧約聖書の義人の苦難のイメージを通して描いている。マルコ福音書は、死を前にしたイエスの苦しみや(マコ 14: 36)、十字架上でイエスが口にした叫びに焦点を当てているが(15: 34)、より後期の文書であるルカ福音書は、神によって与えられた運命として死をより積極的に受容し、自らを神に委ねる姿勢を強調している(ルカ 23: 46)。さらに、ヨハネ福音

³⁷ 佐竹明『ヨハネの黙示録』下巻、新教出版社、2009年、333-366頁；D. E. Aune, *Revelation 17-21* (WBC 52B; Nashville, TN: Word, 1998) 1069-1100を参照。

³⁸ Aune, 1090, 1101を参照。

³⁹ Aune, 1125-1133を参照。

書はイエスが十字架に架けられることを、神の御心の成就（ヨハ 19：30）、或いは、神の栄光の顕現としている（12：23；13：31-32；17：1,5）。

パウロ書簡に保存されている初代教会の信仰告白伝承は、イエスの死に救済論的意義を認めている（ロマ 3：25；4：25；5：6,8；8：32,35；10：9；14：15；ガラ 1：5；3：13；I コリ 5：7 を参照）。これは神の国の接近を説く指導者の死が宗教運動の創始者の死という衝撃的な出来事の中に、何らかの積極的な意味を見出そうとする神学的努力の結果であった。

人間の死を越えた希望について、パウロ書簡は死者の復活の思想と（I テサ 4：18-25, I コリ 15：12-19）、死者の魂の召天の思想を伝えている。死者の復活の根拠は、キリストが死者のうちから復活したことであった（ロマ 6：4-5；I コリ 15：1-11；I テサ 5：10-11）。靈魂不滅の思想は思想的にはギリシャ起源であった（プラトン『パイドン』80A-81D）。新約聖書においては、旧約・ユダヤ教に起源する死者の復活の思想が主流である（I テサ 4：18-25, I コリ 15：12-19）。復活思想は肉体を伴った人間の復活を考えているので、靈魂不滅の思想とは明確に異なる。しかし、死後の魂の状態への思索を進める過程で、次第に靈魂不滅の思想が初期ユダヤ教を介して（知 3：1-5；IV エズラ 7：78-101 を参照）、キリスト教思想の中に取り入れられて、人間が死ぬと体は滅びるが、魂は天国に昇るという召天の思想が形成された。こうした死後の生の観念は、新約文書ではまだ周辺的な箇所に出て来るだけであるが（ルカ 16：19-31；24：43；II コリ 5：1-10；フィリ 1：23；黙 6：9-11；7：9-17 を参照）、使徒後時代以降、次第に強くなり（例えば、ディダケー 10：2；I クレ 28：3；36：2；イグ・エフェ 20：2 を参照）、キリスト教の伝統的思想の一部となって行った（例えば、ウェストミンスター信仰告白第 32 章を参照）。現代の教会も教理としては、世の終わりにおける死者の復活の思想を維持しているが（使徒信条第三項やニカイア・コンスタンティノポリス信条第三項を参照）、信徒が現実を持つ信仰において、終末の到来の切迫感や死者の復活の希望のリアリティは薄れ、死後は天に召され、他の召天者たちと共に神の御許で憩うイメージを漠然と抱いている場合が多いのではないだろうか。

死を越えた希望ということについて、パウロにはさらに異なった視点が見られる。パウロによれば、キリストを信じて洗礼を受けた者は、キリストと共に十字架に架けられて（ロマ 6：6；ガラ 2：19）、キリストの死に与り、その復活の力に与って、キリストと共に生きるようになる希望が与えられている（ロマ 6：3-8）。

ヨハネによる福音書は、こうした信仰の実存についてのさらに徹底した考察が見出される。第四福音書によれば、今、キリストを信じる者は死から命に既に移っており(5: 24-27)、永遠の命を得ている(3: 15, 16; 4: 13-14; 6: 27, 47, 52-58)。ヨハ17: 3によれば、「永遠のいのち」とは、「唯一の真の神」と神が遣わした御子「イエス・キリストを知ること」であるとしている。究極的な出来事は、既に、地上で起こっており、人間の生死を超えた永遠の命に与る可能性が開かれていると言える。

参考文献

日本語文献

- アリエス著(伊藤晃・成瀬駒男訳)『死と歴史』みすず書房, 1983年
 大貫隆『イエスという経験』岩波書店, 2003年
 同『イエスの時』岩波書店, 2006年
 同「死人たちには未来がある—マタイ 8,21f/ルカ 9,59fの新しい読み方」『聖書学論集』44(2012年)57-90頁
 小松美彦・土居健司編『宗教と生命倫理』ナカニシヤ出版, 2005年
 熊澤義宣『キリスト教死生学論集』教文館, 2005年
 佐藤研「新約聖書の死生観」『始まりのキリスト教』岩波書店, 2010年, 31-48頁
 同『イエスの死』ぶねうま舎, 2012年
 佐竹明『ヨハネの黙示録』上巻, 中巻, 下巻, 新教出版社, 2007-2009年
 関根清三編『死生観と生命倫理』東京大学出版会, 1999年
 日本基督教団信仰職制委員会編『死と葬儀』日本基督教団出版局, 1974年
 原口尚彰『新約聖書神学概説』教文館, 2009年
 同『幸いなるかな 初期キリスト教のマカリズム(幸いの宣言)』新教出版社, 2011年
 村上伸編『死と生を考える』ヨルダン社, 1988年
 宮谷宣史編『死の意味 キリスト教の視点から』新教出版社, 1994年

外国語文献

- Aitken, E. B. *Jesus' Death in Early Christian Memory: The Poetics of the Passion*

- (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 2004).
- Aune, D. E. *Revelation* (3 vols ; WBC 52A-C ; Nashville, TN : Word, 1998).
- Barth, G. *Der Tod Jesu Christi im Verständnis des Neuen Testaments* (Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1992).
- Becker, J. *Auferstehung der Toten im Urchristentum* (Stuttgart : Katholisches Bibelwerk, 1973).
- Bieringer, R./V. Koperski / D. Lataire eds. *Resurrection in the New Testament* (FS. J. Lambrecht ; Leuven : University Press, 2002).
- Cullmann, O. *Immortality of the Soul or Resurrection of the Dead ?* (London : Epworth, 1958).
 = O・クルマン著 (間垣洋助訳) 『靈魂の不滅か死者の復活か?』 聖文舎, 1970年
- Dietzfelbinger, C. *Der Abschied des Kommenden* (WUNT 95 ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 1997).
- Dochhorn, J. “Mit Kain kam der Tod in die Welt. Zur Auslegung von SapSal 2, 24 in 1 Clem 3, 4 ; 4, 1-7, mit einem Seitenblick auf Polykarp, Phil. 7, 1 und Theophillus, Ad Autol. II, 29, 3-4,” *ZNW* 98 (2007) 150-159.
- Ebner, M. et al. *Leben trotz Tod* (JBTh 19 ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 2005).
- Frey, J./J. Schröter (Hg.). *Deutungen des Todes Jesu im Neuen Testament* (WUNT 181 ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 2005).
- Friedrich, G. *Die Verkündigung des Todes Jesu im Neuen Testament* (Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1982).
 = G・フリートリッヒ著 (佐藤研訳) 『イエスの死 新約聖書におけるその宣教の限界と可能性』 日本基督教団出版局, 1987年
- Gruenwald, I. “Ritualizing Death in James and Paul,” in *The Missions of James, Peter, and Paul* (eds., Chilton, B./C. Evans ; Leiden : Brill, 2005) 467-486.
- Kaiser, O./E. Lohse. *Tod und Leben* (Stuttgart : W. Kohlhammer, 1977).
 = O・カイザー/E・ローゼ著 (吉田泰・鶴殿博喜訳) 『死と生』 ヨルダン社, 1980年
- Käsemann, E. et al. *Zur Bedeutung des Todes Jesu* (Gütersloh : Gerd Mohn, 1967).

- = E・ケーゼマン他（安積鋭二訳）『イエスの死の意味』新教出版社，1974年
- Knöppler, T. *Die theologia crucis des Johannesevangeliums* (Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1994).
- _____. *Sühne im Neuen Testament. Studien zum urchristlichen Verständnis der Heilsbedeutung des Todes Jesu* (Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 2001).
- Körtner, U. H. “Exegese, Tod und Leben. Zur Hermeneutik des Todes und der Auferstehung biblischer Texte,” *ZThK* 102 (2005) 312-332.
- Kraus, W. *Der Tod Jesu Christi als Heiligtumsweihe. Eine Untersuchung zum Umfeld der Sühnevorstellung in Römer 3, 25-26a* (Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1991).
- Merklein, H. “Der Tod Jesu als stellvertretender Sühnetod. Entwicklung und Gehalt einer zentralen neutestamentlichen Aussage,” in ders., *Studien zu Jesus und Paulus* (WUNT 43 ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 1987) 181-191.
- _____. “Der Sühnetod Jesu nach dem Zeugnis des Neuen Testaments,” in ders., *Studien zu Jesus und Paulus II* (WUNT 105 ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 1998) 31-59.
- Nasrallah, L. S. “Grief in Corinth,” in *Contested Spaces : Houses and Temples in Roman Antiquity and the New Testament* (ed. David L. Balch/A. Weissrieder ; Tübingen : Mohr-Siebeck, 2012) 109-139.
- Pilch, J. J. “Flute Players, Death, and Music in the Afterlife (Matthew 9 : 18-19, 23-26),” *BThB* 37 (2007) 12-19.
- Schnelle, U. *Neutestamentliche Anthropologie* (Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 1991).
- Thüsing, T. *Die Erhöhung und Verherrlichung Jesu im Johannesevangelium* (2. Aufl. ; Münster : Aschendorf, 1970).
- Wedderburn, A. J. M. *The Death of Jesus* (WUNT 299 ; Mohr-Siebeck, 2013).
- Weidemann, H.-U. *Der Tod Jesu im Johannesevangelium* (BZNW 122 ; Berlin : W. de Gruyter, 2004).
- Wengst, K. *Bedrängte Gemeinde und verherrlichter Christus* (München : Kaiser, 1992).
- Wilckens, U. *Hoffnung gegen den Tod. Die Wirklichkeit der Auferstehung* (Stuttgart :

- Hänssler, 1996).
- _____. *Jesu Tod und Auferstehung und die Entstehung der Kirche aus Juden und Heiden* (*Theologie des Neuen Testaments* Bd 1 *Geschichte der urchristlichen Theologie* Teilband 2 ; Neukirchen-Vluyn : Neukirchener Verlag, 2003).
- Wolff, H. W. *Anthropologie des Alten Testaments* (München : Kaiser, 1973).
- = H・W・ヴォルフ 『旧約聖書の人間論』 日本基督教団出版局, 1983 年
- Zeilinger, F. *Der biblische Auferstehungsglaube. Religionsgeschichtliche Entstehung-heilsgeschichtliche Entfaltung* (Stuttgart : W. Kohlhammer, 2008).
- Zimmermann, Chr. “Leben aus dem Tod,” in *The Letter to the Romans* (hrsg. V. U. Schnelle ; Leuven : Peeters, 2009) 503-520.
- Zimmermann, R. “Die neutestamentliche Deutung des Todes Jesu als Opfer. Zur christologischen Koinzidenz von Opfertheologie und Opferkritik,” *KD* 51 (2005) 72-99.